

## バランディエの社会動学について\*

小 関 藤 一 郎\*\*

### I

1969年にパリ大学で発生した学生騒動を契機として行われた大学改革後、大学の構成の中心となった学部 (Faculté) が廃止されこれに代って UER (Unité d'Enseignement et de Recherche) が中心となってから、従来の大学はこの UER のいくつかから構成されることになった。それから30年ほどを経過したが、改革に伴う学生数に対する教育者数の比率が著しく改善された上、パリ以外の地方都市にある大学にも研究所が増設された結果著しく教員数が増大してきた。とくに社会学関係の UER や研究所における研究状況は非常に人員の増加は著しく、また大学院も内容も著しい改善を見るようになった。こうした改革の結果、社会学研究者数は改革前に比べると数倍以上に増加した。戦後直後に社会学を担当した学者は周知のようにギュルヴィッチ、R・アロン、ステッツェル、フリードマン等数人のパリ所在の機関に属した学者だけだった頃に比べて氏名を簡単にあげきれないほどになった。上述したのは大学 Universités の改造だけで、この外ずっと存在していた研究機関はそのまま存続したり、内容を充実したほか、いわゆる Grandes Ecoles とよばれていたところにも社会学研究の部門が設けられたので社会学を専攻する学者もまた著しく増大している。今回ここに取り上げた G. Balandier は1920年生れで、エコール・ノルマル・シュペリール卒業後、アフリカの実地調査研究に従事し何年もの経過とそれを基にした戦後独立したアフリカ諸国についての著作を数多く著わしている 第三世界

Tiers Monde 研究の専門家であり、社会学と人類学を総合した立場から活躍をつづけてきている学者である。が同時にわれわれにて忘れることのできないことは本学の社会学部開設二年目に本学を訪問し、1966年10月社会学部の第1号教室で「経済発展における傳統社会と社会的勢力」と題する講演を行ったことである<sup>1)</sup>。

Balandier が関学社会学部で講演したのは偶然である。戦前東京お茶の水の日仏会館を中心に時々少規模の社会学者間の交渉はあったが余り盛大というほどではなかった。戦後フランス側がこれを復活拡充しようということで、内々に国内でも相談がなされていた。ただ日本側での受け入れ態制がととのっていなかった。ただ田辺寿利 (当時東北大学教授) を中心とした数人のグループが時々に応じて問題を処理していたが、日本でも1960年頃には、社会学部をもつ大学もふえてきた。この際日本でも田辺氏 (故) を中心に本学の数内教授 (故) などでフランス側使節の派遣に対応してきたので、この時もフランスは当時ソボンヌで講義をしていた Gurvitch ギュルヴィッチを使節と考えていたが、持病の心臓病のため辞退されたので、代りに Balandier の訪日となったのである。このことを1966年春京都で社会学研究会の席上、このギュルヴィッチ派遣の件が報告され、京大臼井 (故) 教授も加わり、相談したが、当時とは日本側ではバランディエとは面識もなく、どういう経歴の人なのか、著作のことなど全く不明であった。唯日本に行った際、講演会の題目だの、略歴は知らされただけで、先方からは日本では関東と関西を訪問するが、希望は最も日本の古い所と新 (最) のところを見たいという希

\*キーワード：生きた動学、総合的理解と社会科学の協力、

\*\*関西学院大学名誉教授

1) この講演の内容は社会学部紀要第4号 (1966) に掲載されている。

望であった。それでわれわれ日本側でも相談をし、通訳は私がフランス語がわかるので行うほか、関西方面の旅行日程とそれに伴う費用は私が中心になって考えることとなり、私は阪大、京大等と打ち合わせ、旅行の手筈をととのえることに努力した。経費は一部は関係企業に献金をお願いする外、訪問先への乗物も関係当局に依頼することになった。そのため阪大の喜多野（故）教授の斡旋で天理大で宿泊と車（自動車）等の世話などの御厄介になった。またトヨタ自動車見学もとりいれ、中日新聞からの援助金で名古屋宿泊等々の計画が進んだ。学生諸君はまだ外国人の学者も知らないが、講演会に出て貰い、私はこのため約一週間は完全に休講措置をとって貰ったのを覚えている。Balandier は当時パリ大学教授であったが、ギユルヴィッチを助けて、国際フランス語社会学会<sup>2)</sup>の事務局長として大活躍中であった。

Gurvitch が1965年没くなると代って会長となり、何年かつとめて、後任と代ったが、ずっと顧問をつとめていた。年月の経過は早いもので、Balandier は1990年パリ大学を停年退官した。この時1985年社会学会の後輩たちは *Une anthropologie des turbulances* と題する社会論文集が Maffesoli および Rivière 編で出版され、Balandier 氏に贈呈された。だからバランディエは今年80才になることになり、佛学会の長老になられるが、1977年秋にも東京に来るついでに日本の諸大学等を訪問されたが、万博敷地にたてられた民族博物館を見学され、私はこれを出迎えて本学で懇談会に出席してもらった。この時は蔵内先生も故人になられる前で、非常に喜ばれ、懇談会にも出席頂いた。当日の Balandier 教授の談話はこの紀要の36号（1978年3月刊）にのせて頂いた<sup>3)</sup>。欧米の著名の学者が20年の間に2回も訪問されたことはない例であろうと思われるが、そういうことも考えて筆者には印象の深かった氏の御健在を祈りつつ、氏の特筆される社会学理論の短かい要約を記したいと思う。なお末尾に氏が当日あげた著作だけをあげておいた。

## II

日本では語学の障害があって、ヨーロッパ特に社会学の祖国であることを自他ともに認めるフランスの社会学者が日本に来ることは余り頻繁ではないようであり、また両者の間の交渉を専門とする機関がないためフランス社会学者の活動の現況は案外知られていない。デュルケームやブーグレ、モースなどについてはとにかく、戦後の大学改革以降のフランス社会学の活発な動きについての情報は非常に乏しい。ベルギー、ドイツなどでも、外国語の関係もあるため国際的な学会誌は日本のよりも多いくらいであり、フランスは人口比ではわが国の半分程度であるが、国際誌は五つか六つ数えあげることができるほどで、投稿者の数も多く、審査員制によって原稿を選択している。英国の *British Journal of Sociology* や *Sociological Review* でも受付けてから最終の受諾までに二、三回の修正がなされていることが、各論文の最後に銘記されている。われわれは他山の石としてこうした状況を見習うべきであろう。

さて、筆者が Balandier についてかくのを選んだのは一つには上述した Balandier の訪日の由来との関係もあるが、もう一つには Balandier はアフリカ専門の研究者ではあるが、社会学界でもすぐれた活動をしていて、他の社会学者に対して遜色をとらない優秀な社会学者であり、しかも今日世界的にも比重の重みをましている社会学と人類学の両分野において活動分野を第三世界からはじまって世界の各社会にまで拡大しているばかりか、すぐれた理論的考察だけでなく実証的研究の面でも業績をあげているからである。彼がギユルヴィッチの後継者となった *C.I.S. (Cahiers Internationaux de Sociologie)* 誌上にも20年以上にわたりアフリカ社会の現実的理解と冷静な科学的判断を示した多くの論文を発表してきた学者は稀である。1988年に刊行された Pierre Ansart の著作 *Les Sociologies Contemporaines* は1980年代を中心にフランスで最も顕著な活動をしている

2) この学会を AISLA (Association Internationale des Sociologues de la langue française) といい。この機関誌が *Cahiers internationaux de Sociologie* である。

3) この時には予定を変更して、「自分の研究をふりかえって」となっている。

現代の社会学者として Pierre Bourdieu, G. Balandier および A. Touraine や Michel Crozier および R. Boudon の五人をあげ、それらの学者の理論の比較検討を行っている<sup>1)</sup>。おそらくこの五人ほどが、選ばれたことに対する異論はないであろうと見られる。このうち G. Balandier はアフリカ研究から出発して社会学、人類学の分野で幅広く活躍した唯一の人であるといつてよい。その意味で G. Balandier を現代フランス社会学を代表する一人と見ることは誤りないといえる。しかも Balandier は1962年フランスの大学ではじめてアフリカ研究に「黒アフリカの民族学および社会学」の講座を開設したアフリカに関する社会学の専門家としてアフリカ（特に黒人アフリカ社会）の研究に社会学研究を実現していった第一人者である<sup>4)</sup>。Balandier はこの講義の中で、グリオール Griaule が1956年に没して以後のフランス当局の英断の措置を喜び、と同時に彼がアフリカの事実から学んだ社会動学的構想とアフリカ社会における歴史のもつ意義を語っている。本稿の社会動学という題目はこれにヒントを得たのである。社会動学 *dynamique sociale* の名は社会学の開祖オーギュスト・コントによっても用いられたのであるが、それから100年経過した現代での Balandier のいう社会動学の意味は異っている。Balandier はアフリカ研究から学びとった社会動学の構想をそれ以来練成してきているが、それは1971年に刊行された著作 *Sens et Puissance*<sup>5)</sup> の第一部においてかなり詳細に敷衍されている。この著作は第一部「内生」動学と外生動学、第二部従属、第三部移行の構成から成っているが、第一部は特に著者がこの著作のために新たに書き加え、全体をリードする理論構成となっていて、新しい用語が用いられている。筆者個人の漢字知識の不足とヨーロッパ語の構成の仕方の違いをこえることの難しさをつくづく考えさせられることが非常に大きかった。その点は措くとして以下主としてこの *Sens et Puissance* の第一部に従って社

会動学の概念を説明していくことにする。ところで Balandier の社会学ならびに人類学研究の窮極の目的はただ肘かけ椅子に座って人類の将来を夢想するだけではなく、現実を *actuellement* 把握し、人類の幸福の増進をはかることであろうと推察される。たしかこの *Sens et Puissance* のどこかで読んだように思うが、残念ながら、ノートに記入していないので直ぐには確かめられない。ただ *Sens et Puissance* の序文のはじめに「本書に収められた論文は異なった時期にわたり書かれたものだが、長期に亘って執拗に続けられた計画の所産である」とあるから大きい目的をたてて、その実現のためいろいろ書かれた論文（第二部、第三部を構成する）に、第一部の第2、3、4、5章などはかなり以前の所産である。それにこの書のため特に付加された第1章が全体の方向づけを定めているのである。だから、これと本格的にとりくめば短かい論文で扱うのには勿体ないといえる。しかし筆者としてもそうした問題をまったく考えたことがない問題であるからその中心問題に接近したいと考えたのである。わが国も戦後世界の歴史の舞台の上に立つ立場におかれて見ると、第三世界とはいわないまでも近代化にとりくんでいくことが要求されていたから、とくに関心をもたざるを得ない問題であった。この本学における最初の講演の当時 Balandier の社会動学についてこの期間（1960年代）における考え方はまだ完全だといわないまでも、後日におけるほど練成されてはいなかったであったことはその時の話の内容はむしろアフリカでの経験から学んだ、近代化にとりかかっていたが、それにとりくんで歩みはじめた頃の伝統的勢力の残存の問題が大きく浮びあがっていたように思われる。だから、第一回の講演では第三世界における伝統社会の価値観の強い反抗に関する問題がマダガスカル島の Timoro 族に残存する即位の儀式 *cérémonie d'intronisation* の残存とそのもたらす力（効果）についての例があげられていた。筆者はこの講演の

1) これらの学者の活動時期を1970-1980前後に限ってみている。

4) この点について Balandier は CIS vol. XXXIV (1963) はアフリカ社会学講座の開設記念の講義でその意義について「アフリカ研究から社会動学と歴史」と題する発表で詳述している。

5) この著作はつづいて1980年にも二版が刊行されたが、1996年拙訳が刊行された。訳には苦心したが余りよくできているとはいいいかねる。

二年後、1964年秋カナダのケベックで開催された国際フランス語社会学界 A.I.S.L.S. の年次大会に出席し、この学会に入会を許された所快諾を得たので約一週間先輩の学者たちと休憩時間や食事後の一寸した時間にひそかにアフリカ研究をしている人々と話す機会があったが、その席上でもダカールで研究中のフランス人学者などから、たまたま話が西欧との自由通商が認められた西アフリカの商人たちの間でもそういう風習が当然のこのように行われ、このため初期の資本蓄積がはたして想像できないほど進んでいないことの実例を耳にした。アメリカがインドで工業化を支援するつもりで工場を移転してもカスト制度の桎梏にはばまれているという話をよんだり、きいたりしていたのでアフリカでもそういう伝統社会の抵抗の根強さを教えられたことを想起したのであった。しかし、そうした伝統的勢力が執拗に残存しているということはそれが不変であることを意味するものであることを意味するものではない。Lévy-Bruhl が未開人の心性 (mentalité) の基本としてそこに融即の法則 (Loi de participation) をあげたことは周知のことであるが、Lévy-Bruhl はそのことから未開人の心性と文明人の心性との間に根本的対立を見たのであるが、未開人と文明人との間に全くの異質性を想定することは進化論の単純な信奉的態度に比べると意味はあるとはいふもののそこに絶対的異質性を想定することもまた極端な反動である。Balandier は未開社会を伝統支配とか前論理的 Pré-logique<sup>5)</sup> とかいう理念型をつくりそこにあてはめようとするには反対なのである。それは農業の支配的な、技術水準が低いことによって、また都市生活の未発達によって特徴づけられる生活様式の支配によって都市的、あるいは合理的な生活の進歩が確立するにいたらないために生じている現象であると見るのである<sup>6)</sup>。

Balandier はこうして途上国あるいは第三世界の諸社会を動的なものとし、伝統の支配というよ

うな一面的な固定的見方を排除するのである。だから、「意味と力」の第一部の第一章の社会動学の考察にあてられた章はきわめて簡潔に要点を抽出した社会学説史的考察である。しかもこれはプラトン、アリストテレスの古典までは溯らないが、文芸復興より近代合理主義哲学の台頭期まで溯つてずっと以降、現代の社会学の古典および構造機能主義の理論までをも含めているのである。そうすることによって、伝統性の意味を近代性との対比において把握し社会変動という概念の意味を明確にしているのである。

Balandier のいう伝統は連続性と変動の二つの面から考察されなければならないのである<sup>7)</sup>。われわれが社会の「不変的要素、その維持の要因、その連続性を考察するか、それともその構造的変化を考察するかに従って」<sup>8)</sup>著しく異なったイメージをつくりあげる。社会的現実に対する考察の仕方はこうしてその伝統に関係せしめるか、あるいはその革命が突然の変動を惹起させる過程に関係せしめるようになるのであって、社会思想の歴史はこの二つの解釈の長期にわたってつづいた対決の未完の論事を明かに示しているのである。最も保守的な考え方は窮極のところは、すべての社会はある程度の連続性を表わしているという。すなわちすべてが変化しているものではなく、また変化するものは「一括して」変わるのではないという観察に基づいている。こうした理解の仕方を弁証法的に克服することが到達すべき重要点である。理論の領域においても社会システムの内部に作用するものと同等の克服が必要であって、それを Gurvitch は伝統と革新の間の恒久的弁証法という窮極の形で考察したのである。変化している社会 (工業化などにより) についての長期的の変動傾向、それらの一般的運動を支配する方向づけを規定しようとする試みが最近の T. Parsons などにも見られる<sup>9)</sup>。人類学の領域でまた1957年に定式化した願望の慣例的な構造分析から動的現象についての厳密な解釈を日ざす研究への移行も

6) これらの工業化や技術の発達、文明の進歩等については Balandier の意味と力 (*Sens et Puissance*) の p.122 頁 (邦訳) の伝統と連続性参照

7) バランディエ、前掲書第一部第三章 p.115

8) 同上

9) T. Parsons, *Societies, Evolutionary and Comparative Perspectives* (1996) など

いろいろの方法によって実現しているように思われる。こうした動学的理論の復活は今日の社会諸科学の発展および、事態の力に帰着するものでありまた動学的傾向が多くの社会に影響を及ぼしている。そうした歴史上経験したことのない状況を作り出して、われわれの社会における内部から生じてきた変化はわれわれにとって外部から効果を及ぼすような事態になってくるのである。**Balandier**によるとそれがギュルヴィッチのいう弁証法的法則の効果なのである。だから伝統的因習とか、近代性の対立はそのまま永続的に対立をつづけて存在しているのではない。そういう観点に立って社会システムの現実の動きを把握しようとするのである。**Balandier**は従来の動態学的理論の一元性に対してその多次元性を明らかにすることが不可欠であることを強調するのである。「意味と力」の第一部における社会学の学説史的回顧を行っている時にもそうした傾向をはっきり示されている。この「意味と力」の全体の中で約5分の1をそれに充てている。それは全部ここでとりあげることは不可能なのであるから省略したが、しかも社会学プロパーの理論史だけではなく、**Balandier**がよく摂取して吸収している人類学史上の考察をふくめるとその必要性は理解されると思われるが、ここでは筆者が特に重要であると認めたものだけをとりいれたのである。だから、時には前後の関連がはっきりしにくいところも出てくるかも知れないが、そういう点は彼が論争した問題に対する考え方などから推してとりあげて説明するしかないのである。たとえば、**Balandier**はこれからの社会科学にとって最も大切なことは **interdisciplinary** の研究であることをのべているが、これは末尾にあげた文献の中の初期の著作の中のギュルヴィッチ編著、*Traité de Sociologie* (1959) の chap. V の *Sociologie, Ethnologie et ethnographique* の p. 111—p. 113における結びの言葉の一つであるが、これは関学紀要1978年にのった「私の歩んだ道」にもべられている言葉である。社会諸科学の発達は最近とくに著しく、その対象領域が接近し、重なり合うことが多くなり、多元的社会の現実性が複雑になるにともないこれ

に接近するための道であることは当然である。この学際性は更に学者の国籍をこえて、学問社会における一市民としての協力発揮を要求することも遠い未来のことではない。そういう決意を以て学問に進まなければならないことを教えたものである。

### III

しかしそのためには考察の対象となる社会についての分析が不可欠である。アフリカ社会における原住民社会を考察した **Balandier** はとくにその点をアフリカの黒人社会に植民地問題 **Problème Colonial** が現在におけるその外観はどうであろうと現代における最も重要問題として社会学者には現われるべきものであるとのべ、そこに現われている新しいナショナリズム **nationalismes** の突発的成長と意味を指摘する<sup>10)</sup>。つまり旧アフリカ植民地の独立が与えた衝撃について、それが惹起した反作用とこの反作用の尖鋭さはもはや無関係であり、無関心であることを許さないものであることという。そこにおける社会変動の考察を任務とする人類学的考察は特殊な状況 **Situation** としての植民地状況と見ることを要求し、特にその運動を指導する主動者と変化の過程に対して一定の方向づけを要求していることを力説する。と同時に従来なされた考察がそれらを別々に分けて考察しており、それを全体として行ってこなかったことを批判しているのである<sup>11)</sup>。このような変化は単なる限定された意味の変化とは質を異にするものなのである。そこで **Situation coloniale** 植民地状況については平常の状態における変動とは異なった全体的把握が要求されるのである。これはむしろ従来の人類学者が文明の衝突 **heurt des civilisations** という概念でよんでいたもの、または **heurt de races** (人種の衝突) とよばれたものに相当する質的に異なる大規模なものである。こういう現象をそのもつ重要性にふさわしい概念で把握するためには **Malinowski** マリノフスキーのように異文化の接触という用語での理解はアフリカにおける植民地における白人と黒人の接触を真の

10) **Balandier**, *Sociologie actuelle de l'Afrique Noire* p. 3

11) *idem*.

姿において把握することには足りないのである。その意味で Balandier の批判は現実的 *actuel* 理解のためには不可欠であり、Balandier の「黒アフリカの現実的社会学」の第一章植民地状況の概念<sup>12)</sup>で展開されている動学的批判は重要な意味をもつのである。この章の結論で Balandier は黒アフリカ研究への入門の言葉としてこの *situation coloniale* を次のようにまず列挙する<sup>13)</sup>。小数派の外国人、しかも人種的に文化的に異った外国人が、人種のおよび文化的に独断的に優越的という自称の美名の下に物的に劣等の原住民の大多数に対して支配を強制する。すなわち異質的文明関係にひきいれることであるとすると、その文明は機械利用の高度化し、急速なリズムの強力な経済に支えられた文明であり、その起源はキリスト教に負うものである。つまり西欧文明が複雑な技術をもたず、経済はおくれ、キリスト教文明と対比的するのだがキリスト文明に支配されているのであるとみる。しかし Balandier はこのように個別的な特徴を列挙するだけでは不十分で、この全体が包括的社会を構成する集団をこれらの集団に固有な集会的表象として問題とするものである。そして植民的状況はそれらの全体性を歴史的に捉え、それぞれに日付を与え、その廃止まで検討、吟味することを要求するものである。だから Balandier はこのような原住民の社会は、それに参加する人類学者を植民的状況に従っているものとして考察するのである。つまり個別の集団はこの植民地はこの包括的社会の中にあるものとして、同時に植民地の内部にあるものとして捉握するのである。だからこの包括社会を二重の支配の下にあるものと見るのである。この点で Balandier は従来の研究が各社会間の制度的相違の接触としては見ないのに対し、植民地的な政治的支配の面を重視するのが特徴なのである<sup>14)</sup>。つまり Balandier は Malinowski の文化的接触を同時に植民的支配の介入する面と併せて考察することを要求するのである。またそれが現実的な把握の本質であると見るのである。その意味で Baland-

ier はイギリスの Gluckmann の研究の例をあげて彼が、植民地された黒アフリカにおける黒人社会と白人社会が同時に同じ全体の変化をうけていることを植民地化 *Colonisation* という植民地状況の概念を用いて指摘していることを高く評価するのである<sup>14)</sup>。ただ南西アフリカにおける事例はアフリカについて一体、*Société Globale* とみられる国民国家（部族国家）がエジプトとか二、三の例を除いて未知であることが多いばかり、最近では O.D.A. の援助の対象地域もふえているとは思われるがわが国との経済関係も明白でないため、親しみをもたないので、たとえば Balandier の説明を見てもピンとこないものが多く、何となく理解が困難であることが多い。戦後日本の経済生長が世界の注目をあびるようになってはじめて舞台にのぼってきた感じであるため、しかも大体 1960 年後半以降のことであるため、記憶にとどまるものが少い。二、三年前のことだがフツウ族とツチ族との紛争についての報道が大きくなり、国連軍の一環としてわが国の自衛隊の出動の要請が出たときも多くの人にはよそごとのように見られた。アフリカに関する月刊誌アフリカがアフリカ協会から刊行されていることさえ知らない人が多いのである。こうしたことに対してはボランティアなりの活動ももっと考えられるべきであろうが、イギリスやフランスなど旧宗主国として植民地をもっていた国ではアフリカ諸国の独立以降も植民地支配の罪のつぐないということからか旧宗主国の援助は盛んである。またそれは当然といえば当然であるが、日本の人類学者で比較的最近まで現地について調査活動に従事した人は東外大の川田順造氏ぐらいである。日本はもっとこういう所に研究者を派遣したり、そういう活動への支援を強化すべきことである。Balandier は戦争中のある事件がきっかけでこの方面の人類学研究でリーダーの役割を果たしてきたし、今後もアフリカとのきづなは強く残っている。こうした面での活躍は Balandier のように人類学、社会学会に事実の面だけでなく理論の面でも成果を拡大して

12) Balandier の用語は *situation coloniale* である

13) Balandier, *ibid.*, p. 34-35

14) Balandier, *ibid.* p. 35

14) *ibid.* p. 36

いるのである。こうしたことを考えると、世界の距離は航空機などの著しい発達により縮まったとはいえ、多くの青年学徒の活動を招いているのである。私たち老兵には去る日が迫ってきている。国連関係の諸機関の活動も優秀な学徒の参加を待っている。生活の豊かさの追求は物的面ばかりでなく、科学、研究の面においてますます需要がましているのである。その方面への供給に若い力をもっと多く注がれることが期待されるのである。そういう日が遠からず来ることをわれわれは期待しよう。そしてそのための先駆の大役を果たし終えた Balandier の「黒アフリカの現実社会学」の最後の言葉を次に要約しておきたい。Balandier はこの著作の最後に Fang 族と Ba-Kongo 族についての研究の総まとめをして動的社会学 Sociologie dynamique と社会変動の結論としているのである<sup>15)</sup>。

この二つの部族 Fang と Ba-congo に捧げた研究を通じて社会変化とこれら各部族社会に固有のうけた不均衡 (des équilibres) を明かにしてきたが、その際ある種の一定規模の特性を示す傾向と過程を明かにしてきた。そこでわれわれはこの二つの社会を対比させることによりひき出すことのできる教訓をまず明示すべきであろうと考える。二つの社会は植民地以前から隣接して生活ししかも文化的には類似の条件下にあったのだが植民地状況 Situation Coloniale に対して同じようにまた同じ強度で反応したのではなかったことは明白である。Ba-Kongo 社会はガボンの Fang 社会がなしたように不均衡と問題を累積してくることはなかった。両者の最良の適応は内部に向ってより、外部に向って向けられてきた。すなわち自立に向ってむけられることに明示された。それは特に社会的現実のあらゆる次元の検討に向けられた。すなわち、かなり均衡のとれた人口状況、進歩的といつてよい経済とさらに効果的な制度の体系に向けられた。これらの諸側面の間には明白な連帯関係が存在していて、Fang 族社会全体の中

極めて対照的な地域についての差についての研究はその存在を明らかにしている。たとえば Wolen-Ntem は比較的高度の居住地域や民族の生命力の強さで人口が稀薄で、全体に低落的に向っている Moyen Ogooné 地域と対比される。最初の観察で明白になったことは更に明確にされるべきであるが、それらを検べて見るとこの地域差は一連の質的相違となっていることが明らかになる。そして「私が Fang 族と Ba-Congo 族の対比について最初はアフリカの原住民社会には歴史はない伝統的社会であったと多くの人びとから信ぜられたのであるが、「実際に調査をして見るとアフリカ社会も歴史のある社会であることがわかってきたのである。」 Balandier が最初に調査した社会はセネガルのレブ族の社会であるが、彼はここでこの社会が単純な伝統社会ではなく複雑な歴史をもつイスラム教の影響をうけた<sup>16)</sup>社会であることを明かにしたのである。同時にこの社会が問題をかかえた問題の社会であることが明かになった<sup>17)</sup>のである。しかも Balandier の研究によるとこれらの伝統的社会と見られ社会は孤立した社会ではなくその特性を調べるには外的社会、それらの植民的政策の影響を無視することはできないことを教えられたという<sup>18)</sup>Fang 族社会と Ba-Kongo 族社会と対比研究調査からそれらの経済的過程について、これらの社会が常に統御されている人間の数が支配されている財の量よりも威信を決定する文明によって強く影響されていることを想起せしめるのである<sup>19)</sup>という。しかもこの人間と財の資本化は分離されることを許さないで、新しい経済的關係は従来からの力と優越の関係をくつがえす傾向をもっていることを明らかにした。このため、経済的競争に参加することによってしか、維持できない伝統的権威と最初は伝統的手続きに訴えることによってしかその威信を主張できなかった高い経済的地位にある個人との間に対立関係が現われてきたのである。

このように地位と力が合致しなくなったことに

15) G. Balandier, *Sociologie actuelle de l'Afrique noire* (1963. 2<sup>e</sup>éd) p. 489—520

16) Balandier, 「自分の研究をふり返って」 関学紀要1978年3月号の第36号 p. 35

17) 同上

18) 同

19) Balandier, *h'ouorage de l'Afrique Noire.*, p. 500

基づく敵対関係のほかにもこの政治的システムの内部における明白な不均衡はさらにもっと一般的な過程によって条件づけられていることを注意しておく必要がある。Evans-Pritchardなどはアフリカの政治システムという著作への序文の中で、社会構造は決して静的に考えられるべきではなく、たえず回復されることによってしか持続しない均衡の条件として見られなければならないとのべている<sup>20)</sup>。ところがこういう均衡への復帰の可能性が今は消失しているのである。部族の酋長または結社の長（これらの人々は親族関係に対して優越していた）のもつ権力と結社のもつ権力の間に存している古い補償の関係は普通には再び確立されることはなくなっている。植民地行政当局によって長い間支配されてきた酋長はすべて権威を失ってしまっている。いろいろの結社の方は宣教師や行政当局の力によって攻撃されて相当数がなくなっている。この点について Fang 族と Ba-Kongo 族は注目すべき対応を示したのである。それは両部族が彼らが新しい行政の下での役割を考えて、新しい組織の内において定まった地位を得ようとした時、新しい型の社会的役割がぶつかるいろいろな混雑が不均衡の原因となったのである。それは新しい型の役割とは植民地当局下における役人、新しい経済的役割または労働者の役割のことであるが、原住民たちは最初は長い間周辺的存在でしかなかった。もちろんそこに力動性ははたらいって固定ではなかったが最初はこのため、民族的組織が外的影響により受けた変遷のため Fang 族の人々は不安定な困難な状態におかれていた。そこにわれわれは不均衡の時期に彼らがおかれたことを見たのである。それは古い慣習と新しく変動に応じてそれに適応する期間におけるずれの時期だったのである。このずれの時期の縮少のための時間の中に、アフリカの古い社会の近代化への適応の時期があったのである。この問題は「意味と力」においても特に一章が設けて詳細されている所である。（同書、第三部第三章、社会—文化的な不均衡と発展）。しかしこの叙述に

ついても少しこれを補っていると考えられるのが、「黒アフリカの現実社会学」の最後の章における移行期と社会的な不均衡 *Transition et déséquilibres sociaux*<sup>21)</sup>である。それでその問題をここで補っていくことにする。こうした移行期、古い民族組織から新しい時代の社会構造への変化について Fang と Ba-Kongo 族の直面した状況についての記述である。この点について Balandier は Lévy-Strauss が *C.I.S.* の論文<sup>22)</sup>で論じていることを引用して、そうした現象を「等閑視することの困難な刻印を与えられた出来事」として説明している。こうした出来事はあらゆる社会に見られる近似的なものであるとして、それはさまざまな可能性と改良の試みの度合いを示すものであり、そこに多くの例外の存する余地のあるものであることを認めるものであるという<sup>22)</sup>。Balandier この後になって、Lévy-Strauss が、1964年未開社会の文化の特徴を *le cru et le cuit* として根本的特徴を対照させながら、しかも各章の展開を音楽になぞらえて説明している部分については社会構造を固定化するもので、真の生きた構造を把握する途ではないと批判したが、この時期の Lévy-Strauss の考え方にはこれを明示していた点が明白であったのである。余談になるが、1965年頃になると両者の批評は感情的になってきて、Balandier の第二回目訪日の際、ちょうど新学期のはじまる頃のこと二人の行動はこの狭い日本でぶつかり合ったため、それをさけるため関係者が苦心したことを想起させられるのである。アフリカ社会が新旧の異なる文化体系や価値体系の衝突によって不均衡が問題となり均衡回復へ、可能性が喪失した時期古い酋長の権利とその喪失の時期こそはまさしく人類学者の捉えるべき問題であったが、旧酋長と新しい植民地行政によって推されたアフリカ人代表の権限の衝突は簡単に片づくものではないし、植民地を推進してきた西欧側も戦後のアフリカ諸国の独立獲得を認めたものの、そのあとの新しい行政の適当な受け手が簡単に見つからないため、問題が多かった時期であ

20) Balandier, *op. cit.*, p. 501

21) Balandier, *op. cit.* p. 498—503

22) *La notion d'archaïsme en ethnologie C.I.S.* XII (1952)

22) Balandier, *op. cit.*, p. 499

る。学問研究者にしてもこの時期には多くの調整不備を例外的に認めざるを得なかった時期なのである。Balandier たちの研究もこういう状態の現地においては極めて多大の困難にぶつかったことと考えられるが、この時期を Balandier は<sup>23)</sup>「アフリカの国々が彼等の古い限界をはるかにこえた関係の領域」に定着しようとする時期であると規定している。だから、そこで生ずる諸変化はそれらが結びついている空間の尺度すべてにわたり、新しくいりこむ社会関係の激化、それらが生産したり、操作する量の激増の時期に当るのである。それは社会の進化というより激動期という語がふさわしいのである。この根本的な変化の時期は否定と肯定の二つの局面をもち構造の破壊と再構造化の動きを含むものなのである。

そこで研究者もあらゆる面での比較検討を必要とするが、それは特に次の諸点側面にわたることが要求されるのである<sup>24)</sup>。

- 1) 居住集団の不安定性の減少、とその規模の拡大
- 2) 貨幣収入の一定量を地域的に解放し、一定量の生産物と商品の地域的循環確保
- 3) 拡大する関係領域における技術的、社会的適応への傾向
- 4) 社会構造の現状と社会組織の現状との間に存在するずれの縮小
- 5) ミクロ的特殊性主張主義を減少し、これに代って部族全体性の精神に基づく公共精神をおきかえること
- 6) 文盲をへらし、識字率をふやし、公共文書の利用拡大
- 7) 従属（政治、経済の両面での）政策をすてて対外的政治への対応を強化、効率化、しかもこの面を社会的現実の各層において強化すること

このような問題点を利用して種々の社会的局面がひきおこす問題を比較検討して仕事を絶対に実現させることが要求されるのである。

科学者もこうした問題に対し積極的に協力すべきなのである。

#### IV 全体的社会現象と社会構造の関係

Balandier はついで Fang 族の bilaba（ピラバ）と Ba-Kongo 族の malaki という二つの制度を出発点として全体的社会現象と全体的社会動学間との関係を明かにしている。この二つの bilaba と malaki の制度は植民地化以後変遷をうけてきているが、独立後にも残った類似のもので、Mauss のいう贈与 don の交換を含む慣行であり、富の巨大な消費を含むものである。それは重大な公共的表示を要求し、一種の潜在的敵対心をあらわす社会関係をつくり出したり、増強させたりするので、その中には友情、威信を含んだあいまいな関係を包蔵しているのである。bilaba にしろ malaki にせよ、それらは社会劇の際に演ぜられる葛藤と対決の演出で人々の心を改心させることになるものである<sup>25)</sup>。しかしこの演出は単純なものではなく、その結果は単一なものではない。この制度は多くの時として複雑なテーマを含んでいるので、それらの強調がどこにおかれるかは時節とか時代により異なり、結果も問題となる個人や集団によって異っている。またそれらを統計的に扱ってもこれらの制度の特質をあやまって理解させたり、内容の乏しいものにするだけで、動的研究はそれらを一部かくされている社会生活やまだ明かにされていない社会的生成を明かに示すのに役立つのである<sup>26)</sup>。モースもこの点について、これらの制度のもつ意義はどこにあるのかについて、われわれはこれを通じて社会の動態を明かにするので、それらを固定的に捉えてはならないとのべている<sup>27)</sup>。これらの制度は外国人とそれに反対者間の平和関係の確立に役立っている。そのため贈与の交換は平和関係の樹立のシンボルとなっていることを明かにしている。つまり贈与の交換により親愛関係の樹立もすすめられるし、また部

23) Balandier, *op. cit.*, p. 502

24) Balandier, *op. cit.*, p. 502

25) Balandier, *op. cit.*, p. 504

26) *ibid.*

27) M. Mauss, *Sociologie et Anthropologie*, p. 275

族の婚姻関係の樹立もはかれるのである。これらの制度はアフリカの国々の進化、発展にもなっていて、はじめの形を失っているものがあるが、1940年代ごろには **bilaba** は一部の特徴を維持していたという。特に異った部族間の人々間に介入していることが多い<sup>28)</sup>。そしてその近代的な一般化した形において、この制度は対立しながら交渉している同一部族間の二人の有力者の挑戦の面を残している。そして両者の交渉のはじまりは羊の犠牲をとその肉を共同で食することによって開かれることもある<sup>29)</sup>。これに対して **malaki** の方はどうか。 **malaki** は外見上は **bilaba** のように詳細な含意は明かにされていない点が多いが、 **bilaba** との相違点は **malaki** の社会はすでにもっと社会的装置が進んでいるということから生じている。つまり、 **Ba-Kongo** の社会はコンゴ王国との合併が **Fang** 族の場合よりもっと威信をもって行われたという歴史的記憶が強かったため、近代的植民地化以前に取引が行われていたため **Fang** 族よりも安定度の高い、複雑な社会システムに組み入れられていた。そういう関係で、 **malaki** は家族連合と婚姻を通じての部族間の親和の強い祭日としての面で特徴を示している。それは部族 **clans** と家族（拡大）の諸集団間の交渉によって成立している面を強くもち、これら諸集団の内部対立がかくされている点は余りない。 **malaki** はこれら集団の長、有力者たちをも結びつける。こうして **malaki** はこの部族における基本的社会関係——（それは同時に傷つき易いものであるが）である二つの関係のシステムである氏族と親族の連合を促進し、同時に新しい関係をもつくり出すのである。 **malaki** はむりに仲よくさせた有力者に有力者と親しくなりたい人たち（友人、その他）を加えていくのである。だから **malaki** は **Mauss** のいう意味での全体的支度金（**prestations totales**）のシステムをつくっているのである<sup>30)</sup>。そしてそれが機能するのは豪華な饗宴としてであり、一種の儀式でありはでな親睦会としてである。しかし **bilaba** と異りそれらが

人々の関係の背後にかくれた敵意の存在は許さない。また **bilaba** に見られる異質的のものが対極に存在することはない。だからこの会合に参加することは同時に異質的存在と結びつくことであり、競争が規則化されており、参加するものは皆対等の仲間だけである。 **malaki** は自給自足の経済を交渉による取引の経済に調整させ更にそれを貨幣経済へと調整するのである。相互に給付することはその反対給付を伴うが、この循環は同時に連帯をも保証するのである。合意の成立後の一方の放棄は威信の低下を招くが、一方的破棄は対立を招くからなのである。

この二つの制度は共通の地盤に立ちながら、実際の機能遂行は差異を見せているが、それらはまたある種の経済的、社会的、政治的力動性の表われとして見ることもできるのである。一方は伝統的で、他方は近代的というふうに。そしてそれらはこれらの制度によって抑えられている対立の上に確立されているのである。それらは確立された均衡を脅かすあらゆる局面に敏感であり、一定の新しい調整がそこに実現されることを認めている。この点について若干の説明を加えよう。それは経済的調整に関する規則である<sup>31)</sup>。 **Bilaba** の外部に現れた象徴は分析を容易にしてくれる。異国人とよばれる協力者（腰巻、金具、武器などの耐久物資を輸入してくれる）と婚姻の交換の際昔用いられた貨幣を輸入した）に対して内部の協力者がある。彼らは伝統的農業の製品や特に消費向けの製品（羊、とり、パルム椰子、落花生）および交換物資（象牙、近代になってからのココア）を提供してくれる。彼らのお陰で、二種類の経済がぶつかり合い、調整され合いながら、双方とも敵対の原因とはなることなく、二つの経済は補完的となっている。この面から見ると、 **bilaba** は危険な関係へのプラスの反応を提供する。すなわち、それは交換物資の導入は競争関係にある敵対性を激化させ、価格の高い、蓄財的物資を多量に輸入させ、その結果交換目的の物資の交流を危うくし、結婚の際交換を困難にする。むしろ **bilaba**

28) Balandier, *op.cit.* p. 50429) *ibid.*30) Balandier, *op.cit.* p. 50731) Balandier, *op.cit.* p. 508

などの制度は富の循環を刺激し、経済圏内の富の動き規制する一方、平和と協力の空間を拡大し、新しい同盟関係をそこに加えることになる。こういう点からみると、前の給付に対する反対給付が価値が大きいことは最後の給付をうける者を小売人の立場におくことになり、そこで受けとる過剰価値は給付、反対給付の循環の期間の経済を保障する。マラキの場合も同様な現象を生じさせている<sup>32)</sup>。しかし、給付と反対給付の循環期間の長期化は贈与をうける物資の価値を以前に給付された時の倍にしてしまう。こうして循環の新しい局面は最初の時の交換価値を高めるとともに彼らの間に交換される財の価値を段々高めることになる。

こうして交易の制度は蓄積される富の用いられる時期を考慮して行われることになる。また交換関係にいきこむ人間関係も親戚や血族間の関係の範囲は変わらないが、そこに投機的要素が導入されてくるのである。また、従来の部族間の経済関係が段々と劇的な要素が加えられるようになってくる。だから、従来の関係は集散的劇的關係の様相を呈してくるのである。そして社会は古い自給経済と侵入者である取引経済の両立を組織化することに努めるのであるが、そこに秩序の混乱は不可避となり経済競争の激化が生じる可能性がましてくるのである。ところでこの *bilaba* や *malaki* は *Mauss* の言葉を用いると「全体の動き」*le mouvement du tout*<sup>32)</sup>をうけとることを助ける治癒的効果をもつて持っているのである。*malaki* についての原住民の解釈によると、はっきりとこの効果が認められる。それによると *malaki* は古くから血族の分散した者たちを再結集させそれを再編成させるのである。しかも定期的に分散した血族の成員を集合させ、共同の祖先との神聖なコミュニケーションを確立させてくれるのである。それはまたかくれていた対立が大きくなるのを防止する機能をもっている。また蓄積された富の公開的処理をも可能にする。そしてまた古い血縁者間に真の友人関係樹立の機会を与えるのである。*Gluckmann* も旧英領南部アフリカ地方において見られる地位の不平等から生ずる社会関係が反抗的、対立的関係となるのを防止する役割をこうし

た制度がもつことを明かにしている。

このように、こうした制度にはその現在の条件との関係で見るともっと多くの注目すべきものがある。それらは真の回心を達成しているようである。すなわち経済的優越さは道徳的、政治的優越に変わり不安定で危険な状況にあった金持ちの個人は尊敬すべき、勢力をもつ有力者に変化していた。*Ba-Kongo* の国では *malaki* はすばらしい社会的昇進を可能にした。こうしてかつて奴隷状態にあった被使用人は自由を獲得し、更に富と尊敬すべき地位についている。蓄積された財は真の社会的投資を実現するに至っている。仕事の利益は特に威信の獲得となり公私ともども新しい世界に君臨するようになった。こうして伝統的社会的な論理はこのようにして経済的計算の上でもたえざる優位を保つことに成功している。

*Mauss* のいう全体的社会現象はこうして公式の社会構造の下部にはたらく力動性を明らかにしている。そしてそれらの複雑さは時局により様々な上昇（地位の）の可能性を強化していたのである。

しかし、これらの制度は近代的経済的条件にとって有利な新しい政治的権力の確立が必ずしも容易なものではないことを明かに示している。そういう場合においても伝統的方法によって金持ちが尊敬される有力者にするための一の回心が作用しなければならぬことを示している。というのはこうした社会ではただ豊かな富だけの人間が競争だけで上昇することは一方で非道徳的と見られる途を通らねばならない可能性が大きかったからである。

*Balandier* は最後に *Fang* 族や *Ba-Kongo* 族において救世主教の導入のひき起こしている問題の考察を行って、*Ba-Kongo* と *Fang* 族の面した変動の動的過程の分析をおえている。この問題について *Balandier* は救世教の導入の問題についても折衷的態度をとった *Fang* 族と40以上も救世主運動に協力してきた *Ba-Kongo* を対比させている。アフリカにおける救世主運動（キリスト教的）は一様ではなく、多くの可能的な反響をもたらしているのである。救世主信仰の運動もだから

32) *ibid.*

32) *Balandier, op.cit.* p. 511

非常に多様な受容の形態をもたらしたのである。だから同じ宗教運動に対する解答は一つのものとなるという説明は不可能である。それは矢張り植民地化から生ずる発展がコンゴ地区だけでも同じリズムで進んだのではないことを物語るものなのである。植民地になってからアフリカ各地に宣教師によって普及された救世主信仰運動は植民地に以前から存在していた土着の宗教運動と出会うことによって、土着国乃至は地域によっていろいろと形をかえたり、あるいは折衷運動となり、形をかえたのである。その中の一部は従来の *ethnies* の国境をこえて進んだものもあるが、旧要素と混合したりして折衷的型となったものもある。**Balandier** はガボンの **Fang** 族による **Bwiti** 運動——これはアラブ民族主義者のアフリカ統一の運動を分裂させた<sup>32)</sup>——を **Fang** 族の折衷主義的運動とは異り、それから派生した宗教運動として見てきた。*ethnie* の統一化に寄与すべき新しい運動が、旧来の要素と結合してそれを阻止するような形をとっている事例も存在するのである。しかもこれらの分裂の生じたのはまだ比較的新しいのである。場合によっては独立（アフリカ全体）がはじまる頃にまで溯らないものもある。こうした運動は **Fang** 族全体の統一化を目ざすだけでなく、一部はコンゴ王国への復帰を目ざしているものもある。戦後アフリカでおこった **Kenya** のケニヤッタの全アフリカ統一運動がある一方で、それとは反対に旧 *ethnie* 乃至はその周辺を含めての国土に限られた独立志向の動きも存在するのである。こうした運動にはところによって、植民地化がはじまる前のイスラムの影響をうけたと見られる動きが存在するのである。つまり、宗教運動が一部では民族の *identity* 追求の動きを示しながら、*ethnie* の統一の歴史については文盲の土着民が多かったのと植民地の動きがヨーロッパ列強の勢力の大小強弱によって統一されていなかったことと相まって分裂化を防止できずにいたのである。しかもこのことは戦後の *identity* 探求の動きに影響されて統一化がかえって実現されなくなっているのである。こうした状況の下で、アフリカの地域によってはもっとも古い氏族組織など

の残存が残っており、それが新しい外部からの通商取引などの近代的乃至近代化的的動きともかさなり、入り込んでいるため、その分析だけでも容易ではないのである。また近代化や新しい救世主運動はその統一化の目標は歓迎すべきものではあるが、種々の残存勢力とどのように結び付くべきかの戦略も立てることを困難にしているのである。20世紀も終ろうとしている世界においてこういう大陸の存在しているということは国連などの組織にとっても容易ではない問題を提供しているといつてよい。

1984年ベルリンの壁の崩壊により冷戦の対立は終焉をつげたのであるが、それ以前には米ソの対立がアフリカ各地において極めて複雑な形で残っており、アルジェリアなどの非武装中立勢力を標榜する国々の存在は途上国の多い地域ではともすれば反米的、米帝国主義に抵抗することにより自国の *ethnie* の *identity* の主張する恰好のよい口実となっていたのであるから、途上国（種々の段階がある）の自立への努力を援助するということさえ、従来の対立を他の形におきかえるだけの結果しかもたらしえなかったのである。**Balandier** は *tiers-état* は将来すべてになるというシーエスの言葉を現在の途上国の一般的名称としたといっているが、これからの新しい世紀において量は質を凌駕できるという問題の解決の方向に社会学、人類学者の任務をもたらすであろうが、学者側にそれに対応できる決意と努力が課せられているのである。

## V 結論

**Balandier** は1977年は日本に立ちよった時はもう一度是非来たいといつて戻っていった。年令的な事情などはそれを許さなかったであろうが、学界でも **Balandier** の寄託した課題への対応に十分な準備ができていたとはいえない。しかしこの課題への努力は何らかの形で実現すべきであり、それが同時に21世紀に対する社会学の一つの重要課題であるといえる<sup>33)</sup>。しかしながら、**Balandier** が1990年に退官した時 *Hommage* として彼に送

32) **Balandier**, 意味と力 p. 182

33) **Balandier**, *Sociologie actuelle de l'Afrique* voir p. 514

られた著作は同僚である Claude Rivière と Maffésoli (編) の書名は *Une anthropologie des Turbulances* と題されている。喧騒の時代の人類学とでもいうべきであろうが、Balandier の議論の特徴を示している。ただ、R. Boudon などから提出されている定義に対する不備は重要点をつけている点があるように思われる。たとえば Boudon はこの「人類学」の中で Balandier の *Dépendance* の理論の欠点は重要である。Boudon は *Dépendance* の状態にあるアフリカのナイジェリアが政治的にはそうであっても国連統計を引用しながら経済的成長は十分実現させている事実を認めるべきであろうが、*dépendance* の解釈の問題もこれにからんでくるといえるからである<sup>34)</sup>。

#### G. Balandier の著作目録

1. *Sociologie actuelle de l'Afrique noire*, : dynamique sociale en Afrique centrale. (1955. 4 édit, 1982)
2. *Sociologie des Brazgarilles noires*. 1955, nowe. édit, 1985
3. *L'Anthropologie appliquée aux problèmes des pays sous-développés*. Les cours de Droit/L'Institut d'études politiques, 1955
4. *Afrique ambiguë*, 1957, édit de poche 1983
5. *Les pays sous-développés. aspect et perspectives*, Paris., 1961
5. *Les pays en voie de développement*, analyse sociologique et politique
6. *La vie quotidienne au royaume de Kongo du XVI an XVII siècle*, Paris Hachette, 1965
7. *Anthropologie politique*, P.U.F. Paris 1967, 4<sup>e</sup> édit, 1984
8. *Sens et Puissance: les dynamiques sociales*. P.U.F. 1971 édit, 1981
9. *Georges Gurvitch, sa vie, son œuvre*, P.U.F. 1972
10. *Anthropologiques*. Paris, P.U.F. 1975 édit de poche Hachette. 1985
11. *Histoire des Autres*: Stock 1977
12. *Le Pouvoir sur la scène* Paris, Balland.
13. *Le Détour, pouvoir et modernité*.

共：編著

1. *Sociologie des mutations*, Anthropos, 1970
2. *Les villages gerbonnais, aspects démographiques, économiques, Sociologiques*, Blaz-

- zarille Institut d'étude centrale africaines, 1952
3. *Autour de Georges Balandier* Paris Fondation pour/le dialogue des cultures, 1981

#### 論文

1. 1° *Aspect de l'évolution sociale chez les Fang du Gabon* C.I.S. 1950  
2° *Sociologie dynamique et l'histoire à partir de faits africains* C.I.S. 1963
3. 'Tradition, conformite, historicité' in *L'Antre et l'ailleurs*, Hommage à Roger Bastide, Paris, Berger-Levrault, 1976, p. 15–38
4. 'Les mouvements d'innovation religieuse en Afrique Noire', in *Histoire des Religions* vol. 3, Paris, Gallimard (Encyclopédie de la Pleiade. 1976. p. 1243–1276
5. 'L'Anthropologie africaniste et la question du pouvoir', C.I.S. LXV, 1978, 197–211
6. 'L'imaginaire social dans la crise des institutions' le révélateur anthropologique, *Projet* (Paris) 130, 1978 p. 1185–1191
7. 'Imaginaire, religion et politique dans les cultures africaines.' in J. Davignaud, (ed.), *Sociologie de connaissance* Paris, Payot., 1979 p. 251–259
8. 'Le concept d'empire dans l'histoire de l'Afrique Noire'. in Duverger, (éd) *Le concept d'empire* Paris, P.U.F. 1980 p. 443–459
9. 'La sociologie aujourd'hui' C.I.S. LXX 1981 p. 197–204
10. 'Les dieux masqués.' (d'Afrique, d'Amérique, d'Océanie, d'Asie) in *Les Hommes et leurs dieux* vol. 1 Paris, Larousse 1981 p. 1–60 illu. coul.
11. 'Ethnologie, anthropologie, sociologie' in *Science et théorie de l'opinion publique* Hommage à Jean Stoetzel, Paris Editions Retz 1981, p. 71–78
12. 'Ordre commun, pouvoir et incestes royales in Afrique orientale' *Actions et recherches sociales* (Paris) VI, 1, 1982 p. 107–112
13. 'Essai d'identification du quotidien' C.I.S. LXXIV. 1983 p. 5–12
14. 'Espèce d'espaces japonais' a propos de ("Vivre l'espace au Japon." d'Auguste Berque.) *Critique* XXXIX 428–429 1983. p. 22–31
15. 'Le sexuel et le social' C.I.S. LXXVI 1984 p. 5–19
16. *La sociologie du quotidien* in *Encyclopédia Uni-*

34) *Une anthropologie des Turbulances*, p. 128–p. 142

- versalis*. Vol. 22 (Symposium: les enjeux) Paris 1984 p. 696–699
17. 'Marx insegnato alla Sorbonna Ricordi di Gurvitch.' *Oruaderni di Sociologia* (Turin) XXXV, 2–31985, p. 268–282
  18. 'Comment pent-on être ethnologue' *Les Tempo Stratégique* (Genève) 11, 1985, p. 83–90
  19. 'Une anthropologie de l'imaginaire' in *Encyclopédie des mythes et des croyances* tome 5, Paris, Lidie-Brépols 1985
  20. 'Le Politique des anthropologues' in M. Grawitz et J. Leca (edits) *Traité de science politique* P.U. F. 1985 p. 309–334

日本における講演（いずれも関学社会学部紀要から）

1. 経済発展における傳統社会と社会的勢力（第二号 1961年）
2. 「自分の研究をふりかえって見て」（1978年三月号）（1977年11月談話）

## A Consideration of Georges Balandier's Dynamic Sociology

### ABSTRACT

This article is written as an expression of my admiration for Balandier's achievement in the fields of anthropology and sociology. He gave us a key to understand African social reality. I believe in his kind guidance for us, Japanese sociologists. He taught us what the dynamic structure of the Third World is.

**Key words:** a global appreciation of dynamic reality; total, intensive understanding of the Third World; sociologists' tasks towards Human Society.